

《コミュニティ》

たきざわむら
岩手県滝沢村 「演劇を通じた地域づくり」



たきざわむら

岩手県滝沢村 「演劇を通じた地域づくり」

演劇を通じた地域の連携、異世代交流、青少年の健全育成

子ども達に本物の芸術文化体験を提供することで、
社会教育・コミュニティ再生・文化振興の面で地域づくりに貢献

ここは、ある村のコミュニティ施設、夜7時だというのに、ぞくぞくと村民が集まってくる。彼らは、この村で生まれた「劇団ゆう」の劇団員、毎晩のように稽古に励んでいる。その年齢層は幅広いが、特に目を引くのが、子ども達の姿。あどけない表情で稽古場に現れる彼らも、いったん稽古に入ると、舞台袖で互いの動きや芝居の相談をするなど、その姿はもはや役者である。劇団では、プロのバレリーナがダンス指導にあたり、子どもは大人と同じように役割を任される。こうした環境の下で、子ども達は自己の責任を全うしながら成長していく。



出典)劇団ゆう資料

劇団の公演の大半は無料で行われているが、その活動は村外にも拡大しており、県内の子ども達に芸術文化体験の機会を提供することで、地域づくりの重要な担い手となっている。

一般的に多くの資金と人材が必要とされる劇団活動を、どのようにして地域に定着させ、発展・拡大させてきたのか？そして、彼らが芸術文化の発信を通じて目指す地域づくりとは？

取り組み概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

取り組みの目的

生まれた地域に関係なく、子ども達に様々な芸術文化の体験機会を提供することで、子ども達にとって「出会い・体験・選択の多い社会」を目指す。

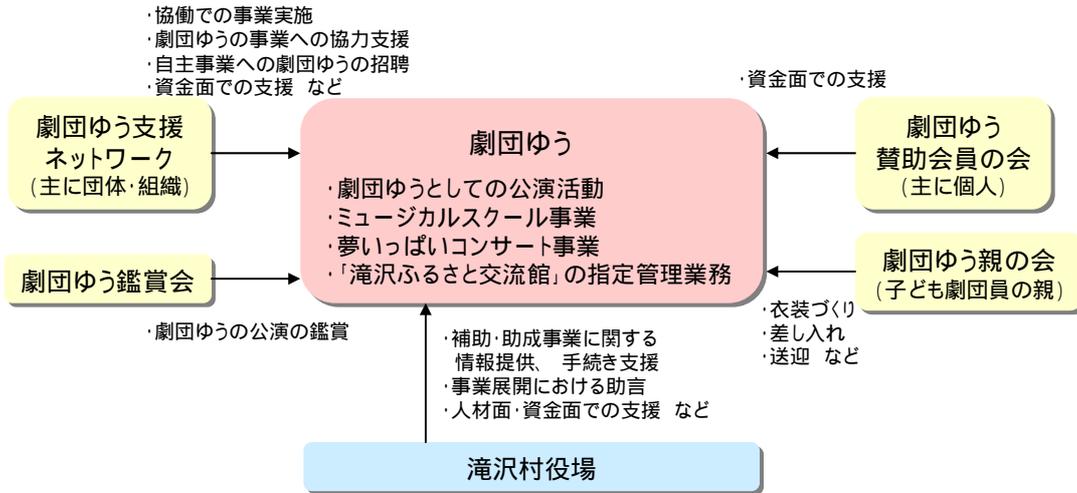
取り組みの内容

- ・ 劇団ゆうとしての公演活動
- ・ ミュージカルスクール事業
- ・ 夢いっぱいコンサート事業
- ・ 「滝沢ふるさと交流館」の指定管理業務

取り組み主体

- ・ 劇団ゆう
- ・ 劇団ゆう支援ネットワーク、劇団ゆう賛助会員の会、劇団ゆう親の会、劇団ゆう鑑賞会
- ・ 滝沢村役場

取り組みの体制



取り組みのポイント

1. 「本物の」芸術文化体験の「惜しみない提供」

子どもたちに「本物の」芸術文化体験を「惜しみなく」提供するため、プロや専門家の指導・協力の下で事業を実施、チャリティミュージカル公演以外のすべての公演を無料で開催、訪問先の子どもの人数に関わらずフルスペックの人材・機材での出張公演等を行っている。

2. 資金面・人材面などでの支援者の存在

劇団ゆうを、資金面・人材面で支援する劇団ゆう支援ネットワーク、資金面で支援する劇団ゆう賛助会員の会など、総勢 1,600 名の様々な個人、団体・組織が、劇団の活動を支えている。

3. 村民との協働での施設づくりによる村民のコミュニケーションの場の形成

村民からの献本を活用した読書スペースの設置、館内での村民のアート作品の展示など、「滝沢ふるさと交流館」の施設づくりに村民を巻き込むことで、施設を村民のコミュニケーションの場としている。

取り組みによる成果

- ・地域づくりの重要な担い手としての劇団ゆうの定着
- ・新たな協力者の出現による地域力の向上
- ・県内の自治体・文化会館などとの文化振興ネットワークの形成
- ・子どもの芸術文化体験機会の増加

今後の展望

- ・財源・ネットワークの強化による組織の継続性の確保
- ・県外への活動拡大による全国的な展開
- ・世界中の子ども達に向けて心躍る芸術文化を発信

滝沢村の概況

人口 53,000 人を越える、日本最大の村

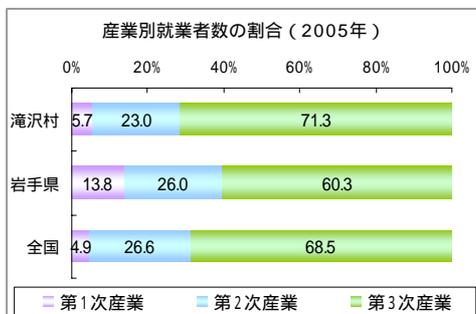
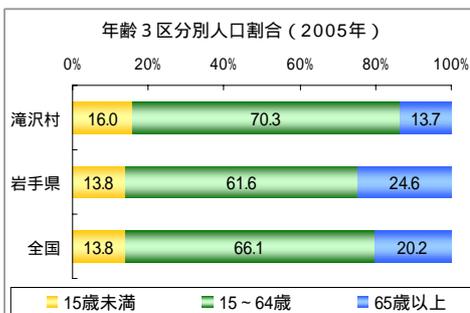
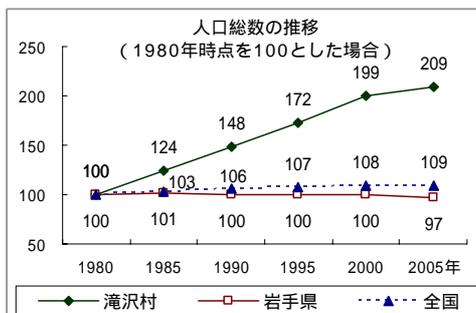
滝沢村は、岩手県のほぼ中央、盛岡市の北西部に隣接する都市近郊の村である。中央部を南北に走る奥羽山系の支系を境に北西部の岩手山麓周辺は酪農地帯、南東部の平坦地は水田地帯を形成している。

2005年の国勢調査によると、人口総数 53,560 人、一般世帯数 19,019 世帯。滝沢村は、古くから農村地帯であったが、豊かな自然を有し、盛岡市と隣接している住環境の良さから、1960年代半ばから大規模宅地開発が進み、人口が急増。2000年には人口日本一の村となった。人口の推移をみると、2005年の人口は1980年の2倍超となっている。その影響を受け、高齢化率は13.7%と、岩手県、全国と比べて低くなっている。

都市近郊の農業地帯

滝沢村は都市近郊農業地帯で、牛乳、岩魚、スイカ、リンゴ、山ブドウといった特産品がある。また、農耕馬として村民と深い関わりのある馬を連れて馬の守り神である神社をお参りする風習からうまれた「チャグチャグ馬コ」(国の無形民俗文化財)などの馬事文化、柳沢地域の陶器・ガラス・木工品などの工芸品の工房群、宮沢賢治作品ゆかりの地などの観光資源も有している。

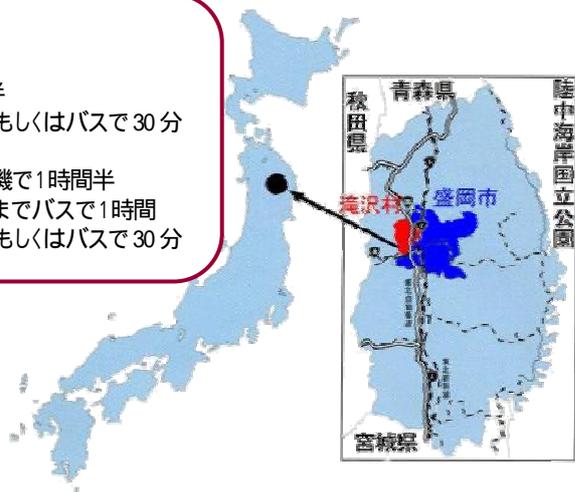
産業別の就業者数の割合を見ると、岩手県は、全国と比べて第1次産業の割合が高いものの、滝沢村は全国並みで、第3次産業の割合が全国に比べてやや高くなっている。第3次産業の中では、卸売・小売業、サービス業が伸びている。また、岩手県立大学の立地を活かし、大学周辺に産官学連携による産業を中心とした企業立地基盤が整備されているところである。



出典)総務省統計局:国勢調査

<滝沢村へのアクセス>

- 東京から盛岡まで新幹線で2時間半
- 盛岡からタクシーで15分、もしくはバスで30分
- 大阪からいわて花巻空港まで飛行機で1時間半
- いわて花巻空港から盛岡までバスで1時間
- 盛岡からタクシーで15分、もしくはバスで30分



出典)滝沢村 HP http://www.vill.takizawa.iwate.jp/chiri_ichi (2011/3/2 参照)

取り組みに至る経緯

青年協議会 OB による「劇団ゆう」の発足

滝沢村には、演劇に情熱を注ぐ若者達がいた。村では、1970年代、100名程度の青年協議会メンバーが演劇や合唱活動を行っていた。そのリーダーを務めていたのが菊田悌一^{きくたていち}氏、現在の「劇団ゆう」理事長である。青年協議会による演劇活動は全国青年大会演劇部門で優秀賞を3度受賞するほどの成績を収めたが、1980年代後半にはメンバーは働き盛りで多忙となったことから活動を休止していた。

その頃、村では、人口増加による急速な都市化が進み、学校が荒れるなど、子ども達を取り巻く環境に大きな変化が生じていた。そのような中 PTA 活動に関わった菊田氏は、子ども達の喜怒哀楽が乏しくなっていることに気づく。

心を沸き立たせるような体験を子ども達にさせてあげたい。そんな思いから、かつて共に演劇に取り組んだ青年協議会 OB に声をかけたところ、15人のメンバーが集まった。「また芝居をやりたい。そして子ども達と感動を共有したい。」そんな彼らの思いから、「村の子ども達に夢と感動を」をキャッチフレーズに、1991年「劇団ゆう」が発足した。

劇団の支援者の出現、子ども組の誕生

劇団として公演を行うには、機材の準備、音楽の作成、ビデオの制作、台本の清書など、本格的な舞台づくりが必要だった。旗揚げ公演の際、これに協力したのが村の事業者や大工である。子ども達の変化を多くの人が危惧しており、自分にも子ども達のため、地域のために何かできないか考えていたことが、こうした支援につながった。彼らは「劇団ゆう支援の会」となり、劇団の心強い支援者となった。

劇団ゆうの公演は、興味をもつ子どもが誰でも観ることができるよう入場料無料で行われた。また公演の度に、村の協力を得て、全世帯へのチラシ配布と村内100箇所の掲示板へのポスター掲示を行った。ターゲットとする子どもに対しては、学校の協力を得て広報を行った。こうして、回を重ねる毎に公演の観客数は増えていった。

鑑賞に訪れた子ども達の中には入団を希望する者もいた。こうした子どもは徐々に増え、発足5年目には20人近くとなった。やがて「劇団ゆう子ども組」が組成され、その保護者は「劇団ゆう親の会」として衣装づくりや差し入れ、送迎などを通じて、子ども達の演劇活動を支えた。こうして、子ども達に鑑賞機会を提供するだけでなく、共に創作するスタイルをつくりあげ的过程中で、劇団に関わる人はますます増え、地域に定着していったのである。

劇団の活動は村外へ拡大

劇団ゆうは、1996年に演劇を通じて地域活性化に寄与する団体として「地域づくり団体自治大臣表彰」を受賞した。また、2000年には財源確保とネットワーク形成を目的として、NPO法人格を取得。さらに、劇団の活動は、県の広報などを通じて広く発信されるようになった。こうして劇団の認知度が高まった結果、村外の自治体等からも声がかかるようになり、その活動は村外へと拡大していった。

村外の子ども達に対しても、出張公演以外に、歌やダンスの出張指導という共に創作するスタイルでの事業を展開した。こうして劇団ゆうは、村内にとどまらず、子ども達に舞台芸術の体験機会を提供する劇団へと発展していったのである。



劇団ゆうの稽古風景(上)と公演の様子(下)
2010年2月に行われた「夢のミュージカル公演」では、村内外の100人以上の子ども達が劇団ゆうの役者と共演を果たした。

出典)劇団ゆう資料



滝沢ふるさと交流館
500人収容可能なチャグチャグホール、学習室、コミュニティルーム、調理実習室などを設置している。
出典)滝沢村HP
<http://www.vill.takizawa.iwate.jp/view.php?pagelid=2254> (2011/3/2 参照)

Point 法人格取得のメリット

劇団ゆうが村外での活動を展開するきっかけとなったNPO法人格の取得。そのメリットとは何なのか。劇団ゆうは、元々は任意団体であった。任意団体が契約する場合、その代表者が個人名義で契約することになる。しかし、委託契約など、契約の種類によっては、団体や法人であることが条件となる。法人格の取得は、法的・社会的な位置づけを明確にし、対外的な信用を得やすくするというメリットがある。劇団ゆうも、社会的な信用を高めることで、委託事業をより積極的に展開して財源を確保し、他の主体とのネットワーク形成を図ることをねらいとして、事業の目的・内容からして最も条件に近いNPO法人格を取得した。結果として、信用性・認知度が高まり、岩手県や他の市町村から委託業務の情報が入りやすくなったという。

現在の取り組み

劇団ゆうは、現在、「劇団ゆうとしての公演活動」、「ミュージカルスクール事業」、「夢いっぱいコンサート事業」を通して、年間20回程度の公演を行っている。また、村のコミュニティ施設「滝沢ふるさと交流館」について指定管理者の公募が行われ、選定の結果、2006年度から劇団ゆうが指定管理者となっている。

劇団ゆうとしての公演活動

劇団ゆうは、団員80名、準団員350名で構成されている。その年齢層は幼稚園児から高齢者まで幅広く、年齢によって、ひよこ組・子ども組・青年隊・大人組に分かれている。年間300日の練習と公演を実施。劇団が行う公演で唯一有料となっている「チャリティミュージカル公演」では、収益金を世界の恵まれない子ども達に寄付している。

ミュージカルスクール事業

岩手県内の子ども達に劇団員が歌やダンスの出張指導を行い、最後に劇団ゆうとの合同公演を行う事業で、文化庁、県、市町村、(財)岩手県文化振興事業団の委託事業や助成事業として実施されている。

夢いっぱいコンサート事業

小規模学校を訪問し公演を行う事業で、ボランティアで実施しているものと、(財)岩手県文化振興事業団の「新進・若手芸術家等派遣事業」として、公演費用の助成を受けて実施しているものがある。



滝沢ふるさと交流館 館長
まえかわけんいちろう
前川健一郎 氏



元々は小学校の校長先生だった前川氏。館内では、利用者に声をかけられる姿が見られるなど、穏やかな人柄が、施設利用者に親しまれていることが分かる。施設づくりにあたって村民に協力を求める際にも一役かってた。

「子ども達に様々な体験機会を」

Q. 指定管理業務においては、どのような工夫をされていますか？

貸館業務では、申請手続きをわかりやすくしたり、申請受付時間を延長し、夜間の申請にも対応できるようにしました。また、施設管理においては、劇団ゆうとして蓄積してきた音響や照明などに関するノウハウを活かし、自分たちで修繕を行うなど、経費節減に努めています。

Q. 今後のよりよい指定管理業務のために何をしていきたいとお考えですか？

ここでは、指定管理業務に対し、職員による内部評価とともに、評議員による外部評価を行っています。外部評議員の構成員には、自治会や施設の利用団体、マスコミ関係の方等になっていただいております。概ね高評価をいただいておりますが、内部評価と外部評価が乖離している点などを中心に、よりよい指定管理業務に向け改善していきたいと考えております。

「滝沢ふるさと交流館」の指定管理業務

指定管理業務は、貸館業務と自主事業で構成されている。自主事業では、小学生が放課後に地域の大人達から料理や手芸、英会話等を学ぶ「チャグホ塾」、プロの声優・俳優が本を朗読する「読み聞かせコンサート」、子ども達に舞台芸術を体験させる「アーティスト育成事業」等を展開している。また、施設利用者1人につき1ポイントを1円に換算し、世界の恵まれない子ども達の支援金として寄付する「チャリティポイント制」を導入している。

取り組みのポイント

「本物」の芸術文化体験の

「惜しみない」提供

劇団ゆうの理事長 菊田氏が目指しているのは、「出会い・体験・選択の多い社会」である。「子ども達が将来、社会を担う時、得意分野で力を発揮するためには、子どもの頃にいかに様々なものに出会うかが大切です。劇団ゆうがそのきっかけ

になれば。」と語る。そのために、劇団が重視しているのは、「本物を」「惜しみなく」提供することである。

劇団では、プロのダンサー・音楽家・演出家・俳優等から指導・協力を得ている。ダンス指導では、専任の講師としてプロのバレリーナを起用。また、「滝沢ふるさと交流館」の「読み聞かせコンサート」では、プロの声優・俳優が無償で出演し本を朗読している。いずれも「子ども達のため」という趣旨への賛同から実現したものだという。こうした本物の芸術文化を、劇団は惜しまず提供している。公演は「チャリティミュージカル公演」以外はすべて無料。また、小規模学校を訪問する「夢いっぱいコンサート事業」では、訪問先の子ども的人数に関わらず、劇団ゆうの団員は50名程度で訪問し公演を行う。音響や照明等の設備がない場合には、劇団から持ち込み本格的な舞台づくりをする。

こうした舞台芸術の本物を追求する理念、さらにそれを惜しまずに提供する姿勢があったからこそ、劇団ゆうの活動は広く受け入れられたものと思われる。



いさわ

胆沢文化創造センター指定管理者
NPO 法人

胆沢文化会館自主事業協会
いわぶちえいこ
岩渕栄子 氏



現在、劇団ゆう支援ネットワークの一員として、劇団ゆうとの合同での稽古・公演を行うほか、指定管理者同士として、ともに文化会館のネットワークづくりに取り組んでいる。

「同じ志を持つ団体の存在は心強い」

Q. 劇団ゆうと関わるようになって、どのような変化がありましたか？

県の情報誌で劇団ゆうを知り、旧胆沢町の町民講座に来ていただいたのですが、その時には、毎年定員を上回る応募があり、反響は大きいものでした。その後、NPO 法人を立ち上げ、胆沢文化創造センターの指定管理業務の子ども向けの体験型事業として「いさわジュニアミュージカルスクール」を設立しました。今、劇団ゆうと合同で稽古や公演をするようになり、子ども達の成長が、より見られるようになったと思います。子ども同士も仲良く、演技の相談をする姿も見られます。劇団ゆうの公演を見に行くと感想を伝える子もいて、交流が深まっています。

Q. 文化会館のネットワークを形成していくなかで、今後取り組みたいことを教えてください。

文化会館同士の連携事業として、「読み聞かせコンサート」を実施しています。また、今年は「子どもミュージカルフェスタ」として、劇団ゆう以外に県外からも劇団を招聘して、合同で公演を行います。こうして、活動の輪を広げていき、県外にも波及していきたいと思います。また、文化会館同士の連携は、予算の面でも助かっていますし、同じ志を持つ団体の存在は心強いですね。

Point 真の理解者を生む情報発信とは？

地域活動団体等の活動を地域に根付かせるためには、良いものを広く提供するだけでなく、それを「広く知らせる」ことも重要である。劇団ゆうでは、公演時に、行政の協力を得て、村内の家庭・地域・学校に広報を行ってきた。しかし、村外向けとなると、劇団としては賛助会員向けの案内と団員自らの手で作成したHP 以外は目立った情報発信はしていない。その理由を菊田氏は次のように述べる。

「うちの活動をきちんと理解していただきたい。パフォーマンスやきれいごとで発信すると間違った情報が伝わってしまうのではないかと思います。」

そのため、発信する情報の内容はよく吟味されている。劇団 HP では、理念・作品・公演予定など必要最低限の情報のみを掲載している。また、新聞等が劇団の活動をとりあげる場合は、事業内容や仕組みを主に書くよう依頼している。事業の中身を詳しく伝えることで、他地域で同じ思いをもつ人の活動のきっかけになればというねらいがあるためである。思いが一致するところから地道に取り組みを広げていきたい。そうした劇団の姿勢が情報発信にも現れている。

資金面・人材面などでの支援者の存在

劇団が本物を惜しみなく提供するには、支援者の存在が不可欠である。劇団ゆうには、劇団ゆう支援ネットワーク、劇団ゆう賛助会員の会、劇団

ゆう親の会、劇団ゆう鑑賞会等の組織があり、総勢 1,600 名が資金面・人材面などで支えている。

資金面では、劇団ゆう賛助会員の会と劇団ゆう支援ネットワークが主な支援者となっており、指定管理料、劇団員の月謝、菊田氏の持ち出し金などとともに、劇団の重要な収入源となっている。

また、劇団の「ミュージカルスクール事業」「夢いっぱいコンサート事業」といった事業を村外で実施するには、参加者の募集や場所の確保、交通の手配、当日の運営など、地元の協力が不可欠となる。これを支えているのが、劇団ゆう支援ネットワークである。増田寛也・前岩手県知事を最高顧問とするこの組織は、行政や事業者、劇団ゆうの地区後援会といった機関・団体で構成されており、協働での事業実施や劇団ゆうの事業への協力支援、自主事業への劇団ゆうの招聘など様々な形で連携している。

劇団ゆう賛助会員の会と劇団ゆう支援ネットワークは、旗揚げ公演時に生まれた「劇団ゆう支援の会」が発展し分化したものである。こうして、多くの個人や団体、組織に支えられることで、劇団の理念は実現されているのである。



滝沢ふるさと交流館の読書スペース
館内の至るところに設置されている。幼児向けの本が置いてあるところは、靴をぬいで上がれるようになっており、子どもの遊び場が隣接してある。

アート作品展示スペース(上)とチャグホ新聞(下)
右側の壁に作品が展示され、座って眺められるようになっている。チャグホ新聞では、館内の事業や行事の様子を伝えている。

村民との協働での施設づくりによる 村民のコミュニケーションの場の形成

劇団ゆうが指定管理者となっている「滝沢ふるさと交流館」は、「アート・スクランブル・コミュニティ」を掲げ、芸術文化を発信するだけでなく、村民が集う場となっている。これを実現したのが施設づくりにおける様々な工夫である。

例えば、館内の各所には読書スペースが設置されている。座って手を伸ばせばとれる位置に本棚があり、気軽に読書ができるようになっている。子どもの読書離れが進んでいる現状を踏まえて設置されたものであり、本はすべて村民からの献本、本棚も村の子ども達で作った。また、廊下には、村民のアート作品が展示されているが、作品に作者の名前だけでなく居住地域もできる限り記入してもらうことで、村民が互いを知り合うきっかけづくりをしている。さらに、自主事業として実施しているチャグホ塾には、30名の村民が講師を担い、子ども達との交流を深めている。

このように、施設での芸術文化活動に村民を巻き込むことで、「滝沢ふるさと交流館」を文化創造+コミュニケーションの場としている。

取り組みの成果

コミュニティ再生から地域力向上へ

今や劇団ゆうは、劇団というよりも、地域づくりの重要な担い手となっている。地元行事の企画・開催やまちづくり関連フォーラムへの参加のほか、「岩手県教育表彰」(2006年)、「岩手県元気なコミュニティ100選」(2008年)といった表彰・選定も受けている。

また、「滝沢ふるさと交流館」は、年々利用者が増加しており、村民のコミュニティの場となっている。さらに、劇団がここを拠点に地域に密着した活動を展開する中で、地域づくりにおける新たな協力者が生まれつつある。最近では、大学のボランティア組織、老人クラブ、自治会、子ども会、他の地域活動団体などから、協力したいとの声が多くあがっているという。

「コミュニティの土台ができて、地域力につながるエネルギーになっている。」と菊田氏。地域に定着した劇団の活動は、地域力の向上につながっているのである。



滝沢村

住民環境部 部長

きくちふみたか
菊池文孝 氏 (左)

住民協働課 課長

いとうけんいち
伊藤健一 氏 (中)

生涯学習課 課長

つのかけみのる
角掛実 氏 (右)



劇団ゆうの発足時から、その理念に賛同し、村長をはじめとして歴代職員が劇団を育てようと支えてきた。人材育成事業を活用した資金面の支援のほか、情報提供や事業の手伝いや助言を行ってきた。旗揚げ公演時には、自ら身体をはって、駐車場の整理をした職員もいたという。

「よきパートナーになれば」

Q. 劇団ゆうが「滝沢ふるさと交流館」の指定管理者となって、どんな変化がありましたか？

利用者数が年々増加していますし、利用者の反応も変わってきました。以前は、利用者から不満の声があがっても十分に対応できないことがありましたが、現在は地域に密着した活動を展開する中で、利用者のニーズや要望にも十分に対応いただいています。また、財政的に厳しい中で、これだけの自主事業を実施していただいております。

Q. 今後、劇団ゆうに期待することを教えてください。

劇団ゆうには、活動を通じて、地域課題の解決にも一翼を担っていただきたいですね。行政の得意分野を生かして、劇団ゆうとはよきパートナーになればと思っています。行政にできることとして、情報提供や相談支援をやっていきたいです。村には、劇団ゆうを含め、様々な地域活動団体がありますが、それを担当する村の職員は縦割りになっています。団体の活動は村の力の底上げにつながりますので、行政としては、各活動が単体で終わらないよう、各団体のつながりづくりをいかに進めていくかが今後の課題となっています。

県内の文化振興ネットワークの形成

劇団ゆうは、県外の劇団との交流も行っており、青森県・山形県・滋賀県・沖縄県などで公演を行ってきた。また、活動を通じて、劇団ゆう支援ネットワークの輪が広がっており、県内の各地に劇団の後援会や連携先となる自治体、文化会館などができている。こうしたネットワークを活用し、2010年には、「滝沢ふるさと交流館」を含む県内の複数の文化会館で連携した公演を行った。こうしたネットワークの形成は人材や資金を互いに補完できるという効果があり、特に予算の少ない自治体や文化会館にとって、そのメリットは大きい。劇団の活動は、県全体の文化振興の底上げにも寄与しているのである。

Point 劇団にとって重要な資金調達方法とは？

劇団ゆうにとって、補助・委託事業は、資金調達として重要なツールである。これまでも、文化庁、県、市町村、(財)岩手県文化振興事業団、民間企業等の補助・委託を受けて事業を展開してきた。劇団ゆうが助成事業を受ける際、県や村から事業に関する情報提供やその事業の活用方法に関する助言、申請手続きの支援を受ける。その過程で、助成事業に関する理解が深まるとともに、書類作成のスキルが身につく、人材育成にもつながったという。こうした経験が、NPO 法人としての管理運営にも役立つということである。



特定非営利活動法人 劇団ゆう 劇団員
滝沢ふるさと交流館 職員

さとうちはる
佐藤千春 氏



子ども劇団員の第1号。家から稽古に行く許可をもらえない時は、2階の屋根伝いに家を抜け出して稽古場に行くほどだったという。そんな彼女のエネルギーが、劇団の発足メンバーの気持ちを支えてきた。そんな彼女も今は2児の母、劇団では指導的立場にあり、菊田氏から「後継者」として期待されている。

「ここにはかけがえのないものがある」

Q. 子どもの頃、初めて劇団ゆうを見たときどう思いましたか？
今は奥深い作品だということが分かるのですが、当時12歳だった私には、正直よくわかりませんでした（笑）。それよりも、何かにのめり込んで演技している役者の姿が印象的でしたね。以前、小学校の文化祭でやった演劇で、自分で考えた動きが先生からほめられた経験があって。演劇っておもしろいなって思っていたので、劇団ゆうの旗揚げ公演の時に劇団の存在を知って入団しました。

Q. 子どもと接する上で重視されていることは何ですか？
子どもだと思わないことですね。芝居の上手下手ではなく、人との接し方とか役に取り組む姿勢とか、人としてあってはならないことは妥協しないで教えています。

劇団員は皆一つの目的に向かっていっているので、個々が精一杯やっているのか小手先でやっているのかは見ていて分かります。子ども達には精一杯ぶつかって迷いの中で何かをつかんでほしい。その子の精一杯まで持って行くために、内面に踏み込んでいかなくてはと思っています。

Q. 劇団をやめたいと思ったことはありますか？
その道のプロになるために、東京に行きたいと思ったことがありました。その頃、劇団ゆう以外の人と初めて舞台をする機会があったのですが、そこでは、皆が自分のことしか考えていませんでした。プロの世界はそうなのかもしれませんが、市民でつくりあげる市民のストーリーを感じることができなかった。劇団ゆうには、劇団員や地元の皆さん、スタッフの愛、そして子ども同士の友情があります。ここにはかけがえのないものがあると気づいて、踏みとどまったんです。

子ども達の変化、後継者の誕生

劇団ゆうの活動により子ども達をとりまく環境も変化してきている。滝沢村生涯学習課課長角掛実氏は、「今の子ども達には実体験が不足している中で、豊富な体験活動を提供して頂き助かっています。」と話す。

また、劇団では、子どもは大人と同じように扱われる。配役の重さに関わらず、演技者として平等と考えられているためである。例えば、子ども組で話し合われた内容はリーダーがとりまとめ、リーダーの発言は、大人と同様に検討され、企画や運営に生かされる。こうした環境の下で、子ども

も達は自己の責任を全うしながら、少しずつ成長していく。居場所のできた子ども、不登校を克服した子ども、人に心を開けるようになった子どもなど、劇団では様々なドラマが生まれている。

こうした子ども達の中には、劇団の運営を担う者も出てきている。12歳で入団した子ども劇団員の第1号、佐藤千春氏は、現在、劇団の青年隊の代表、「滝沢ふるさと交流館」の職員をつとめるなど、劇団運営に欠かせない存在となっている。「演劇を通じて感じられる喜びは、皆で一つのストーリーをつくりあげる劇団ゆうだからこそ。だから、ここに残る決意をしました。」こうして劇団運営の後継者も生まれてきている。

今後の展望

全国展開に向けた組織の継続性の確保

発足時、「10年後には県へ、20年後には全国へ」と目標を掲げてきた劇団ゆうは、いよいよ来年、発足から20周年を迎える。今後は、活動の全国的な展開を目指す。しかし一方で、活動が拡大している中、劇団員の負担が重くなっていることも事実である。そのため、今後は、NPOとして組織を確立し、財源とネットワークを強化することが検討されている。

財源に関しては、事業の目的や運営により合致する法人格の取得、助成・補助事業に関する情報収集、事務機能向上に向けた人員の確保を進めていく。また、ネットワークについては、「できる時にできることをしていただく」サポーターの仕組みをつくり、組織の運営を成り立たせていく。対外的には、劇団ゆう支援ネットワークを全国に拡大、その核となる事務局の人材確保も検討されている。組織としての継続性を確保するための取組が、今後進められていく。



劇団の創立メンバー(上)と小学4年生以下の「ひよこ組」(下)
創立メンバーのほぼ全員が現在も活躍している。彼らの演劇や子ども達への愛がなければ、劇団はここまでこれなかった。

変わらない2つの柱

劇団の活動がどれほど拡大しても、変わらない2つの柱がある。一つは、住む地域に関係なく、すべての子どもに多様な芸術文化の体験機会を提供するという理念。もう一つは、お金だけに頼らず、強いネットワークでその実現を目指すこと。

「どこに生まれても、努力すれば、誰でも成し遂げられることが世の中にはたくさんあるということを実証していきたい。」と菊田氏。それを同じ志をもつ者との関係を深めながら実現していくことで、安定した成長を遂げていく。それが、劇団ゆうのやり方なのである。

世界中の子ども達に心躍る芸術文化体験を

「20年後は全国へ」、その次はというと当然「世界へ」である。劇団ゆうが世界に向けて発信したいのは、日本人本来の美しい心。それを民話を通して伝えていく。同じ志をもつ様々な団体が何世代にもわたって同じように活動していくことで、世界の人々の心が平穏で温かいものになればというのが彼らの願いである。世界中の子ども達に心躍る芸術文化体験の機会を。少しずつ、しかし着実に取り組みは広がっている。



最新作の「美女と野獣」
これを含め現在12作品。どの作品でも、子ども達のいきいきとした表情が輝いている。

出典) 劇団ゆう資料



特定非営利活動法人 劇団ゆう
理事長

きくたていいち
菊田悌一 氏



劇団ゆうの理事長。高校を卒業してから、スポーツ少年団、公民館館長、学校PTAなどを通じて、村の子ども達の成長を見守ってきた。家業はりんご農家で、「活動を途中でやめたら、支える家族を裏切ることになるよ。」と応援する家族のおかげで、活動を続けてこられたという。

「子ども達の変化に気づいてあげたい」

Q. 劇団ゆう発足のきっかけとなった子ども達の変化とは、どういったものだったのでしょうか？

地域で会う子ども達が挨拶をしなくなったんです。気の合う子ども同士だけで遊び、遊び場も施設や学校だけ。子ども達の住む世界が小さくなっていました。でも、変わったのは環境であって、それを映す鏡として子ども達の表情や行動に現れているだけ。子ども達の心は何も変わっていないんです。見かけで判断しないで、子ども達とまっすぐ向き合い、心を開いていくことが大切だと気づきました。

Q. 子どもと接する上で重視されていることは何ですか？

子ども達の変化を見逃さないことです。その子にとって思い切ったことをしたつもりでも、他人からは分からないということがたくさんあります。それにちゃんと気づいて、「あなたの変化を確かに受け止めたよ」と伝えてあげたい。

お芝居は一人ではできません。一人でもできないと成り立たちません。お芝居の中で生きる人生はかけがえのない人生です。要らない人はいないんだって体感してほしいですね。

Q. 劇団ゆうは今後どんな組織でありたいと思われませんか？

全国や世界へ向けた活動の展開というのは、目標として掲げていたい。でも、私たちはあくまで下支えの組織、それに徹して、村に貢献する組織でありたいと思います。旗揚げ公演の際に公演を無料にしたのは、当時の村長さんの助言があったからです。「何とか役場でも支援するので、一人でも多くの子どもの見せてやってほしい」と。そうした村長の思いから始まり、歴代の職員や村民の皆さんの支援があったからこそ、ここまでくることができました。指定管理業務をはじめとする様々な事業を通じて、村の皆さんに恩返しをしていきたいと思っています。